

## 『現代語訳』

## 榎本武揚『シベリア日記』

諏訪部揚子・中村嘉和 編注

(平凡社)

\* 近日中に図書館に入ります

榎本武揚[1836~1908]という

と、「五稜郭に拠って明治政府軍に最後まで抵抗し、敗れて降伏した幕末の軍人」というイメージを抱く人が多いだろう。中には、「明治政府で重用されて大臣にまでなった人物」ということまで知っている人もいるかもしれない。私は世界史の教員として、19世紀後半のプロイセン・デンマーク戦争に彼が日本の観戦武官として登場するという事実に驚き、この人物に関心を抱いた。調べてみると、彼は幕末から明治の激動の時代を生きた「万能人」ではないかと思うようになった。彼自身が著した書物で、公刊された唯一のものが、この『シベリア日記』である。

1874年、全権公使として、ロシアへ派遣された榎本は樺太

## 読書案内

・千島交換条約締結の後、露土戦争[1877~78]が終結するまで任務続行となり、1878年7月13日にベルリン条約で露土戦争の講和が成立して、ようやく帰国が許された。7月26日にペテルブルクを出発し、陸路、シベリアを横断し、9月29日、1万kmを踏破してウラジヴォストクに到着した。この旅の記録が『シベリア日記』である。まだシベリア鉄道も建設されていなかったから、ニジニ・ノヴゴロドから東は、川舟と馬車での昼夜兼行の強行軍の旅であった。読んでみると、その内容は多岐にわたり、ほとんど「學術調査報告」レベルの科学的な記述であることに圧倒される。沿道

の地形、植生、土壌、水質、栽培作物、土地利用、地質、鉱山業、都市や集落の人口と風景、民族と彼らの言語および習俗、生活物資の価格、その日の天候・気温などである。

なかでも心を惹かれたのは、旅の途中で目撃したシベリアへの流刑囚や捕虜に注ぐ彼の共感

に満ちた眼差しである。それは

自らも箱館戦争の最

高責任者Ⅱ「賊軍の

首領」として2年半

の獄中生活を体験し、

ひとつ間違えば斬罪

に処せられたかもしれ

ない立場だったからだろう。

そして、もうひとつの点は、タ

タール人、ブリヤート・モンゴ

ル人、ナナイ人など様々な民族

に関する文化人類学的記述であ

る。10代後半に樺太・蝦夷地の

調査に参加したときのアイヌ民

族との出会いが北方諸民族への

関心を抱かせたのかもしれない。

なお、榎本武揚が1889年(明

治22年)9月6日に文部大臣と

して、大阪尋常中学校(本校の

前身:堂島時代)を訪れ、授業

視察と講演を行ったことも付記

しておく。

福永武彦 著

## 『忘却の河』

(新潮社)

[918/S9/1-4]9



「私の魂とも言わなければならない

彼女が死んだことによつて、私

の魂そのものも死んだ」、「わた

しは自分が同じような経験をし

て、はじめて人生には取り返し

のつくこととつかないこととが

あり、一度うしなつたものには

もう代わりというものが無いこ

とを痛いほど知った」、「己たち

はみんな寂しいのに、どうして

心を通わせることができないの

だろうか」、「パパはきつとママ

のことを好きじゃあなかったん

だけど、結婚した以上は責任を

感じるタイプなのね。夫婦なん

てあんなものかと思うと、あた

し厭だわ。」「お父さんはいつも

御自分の心を隠そう隠そうとし

ていらつしやる、そういう時に

お父さんはとても寂しそう。で

も本当はお父さんはずっと心の

やさしい人だったのね。」

登場人物は5人。罪の意識を

抱える55歳男性とその妻、娘2

人、他1名。時代設定は戦後お

よそ20年。1965年。文庫本

の初版もその時代です。古い小

説ですが、今の時代の人が読ん

でも心に響くものがある話だと思

います。5人の心の内側が語

られます。父親は自責の念と向

かい合い、どう生きていくのか

考えています。妻は過去の不幸

に心をとらわれています。20歳

過ぎの娘2人は、自分の未来に

ついて。30代男性は、妻子持ち

になつてしまった自分の可能性

について。感情移入して読んで

いると、55歳男性が生きる気力

を取り戻したとき、なにやら自

分も穏やかな気持ちになりました。

野中広務・辛淑玉 著

## 『差別と日本人』 (角川書店)

[361/N17/1]

大学時代、在日韓国人の友人が、ある授業で自分が在日韓国人であること、またそうであるが故に経験してきた差別について語った時に、一年生の女性が授業後その友人にこう言ったそう。『私は福岡出身なんです、今日先輩の話を聞いて在日韓国人という存在、そして差別があるということを初めて知りました。』

さて、あなたはどうか？  
日本で起こっている差別問題を  
知っているだろうか？

この本は元衆議院議員で官房  
長官も務めた野中広務と在日韓  
国人で人材育成コンサルタント  
の辛淑玉の対談を基にした本で  
ある。本の中で野中さんは被差  
別部落出身者の視点から、辛さ  
んは在日の視点から、日本にお  
ける差別問題と、日本人の差別  
意識を浮き彫りにしている。様  
々なことが語られるが、日本に  
おける差別問題の根深さを感じ  
ずにはいられなかった。

「無知が偏見を生み、偏見が  
差別を生む」これは私が大学生  
の時にある教授に言われた言葉  
であるが、日本における差別問  
題に「無知」であることが何を  
もたらすか。ネットなどの何の  
根拠もない極端な意見に左右さ  
れ、それが自分の中で偏見にな  
り、結果として差別につながり  
うる。冒頭に挙げた女性は私の  
友人に会えたことで、差別問題  
を知ることができたが、会って  
いなかったらどうなっていただ  
ろうか。在日韓国人の差別問題  
であれ、部落差別問題であれ、

自分たちの住んでいる国で起こ  
っていることである。それに「無  
知」であってはいけない。まず  
は知ることから。この本をぜひ  
手にとって読んでみてほしい。

藤井理恵・藤井美和 著

『たましいのケア』

(いのちのことば社)

『490/F3/1』

「35年ぶりの共感」

わたしは保健の授業の中で、  
「死生学」を取り入れています。  
長期休業中の課題学習として、  
「余命あと三ヶ月だとしたら何  
をするか？」などを考えてもら  
っています。これは父親のガン  
で余命三ヶ月の宣告を受けてか  
らの看病、年老いた母親の介護  
を経験し、人生の中で一番元氣  
な高校生の時だからこそ、考え  
てほしいことがあったからです。  
こういう私も今年、還暦を迎え  
る年齢になりましたが、ここに  
あげた本ほど、なるほどと思え

る本は三十五年前のキューブラー・ロス著『死ぬ瞬間』以来で  
す。人間には精神と肉体があり  
ますが、より深い「たましい」  
というものがあるのです。重い  
病気になったとき、死に直面し  
たとき、私たちは自らの「たま  
しいの叫び」を聞きます。人間  
にとって何が大切かを知ること  
ができます。しかし、日本の医  
療の中では「たましいの痛み」  
に対する「たましいのケア」は  
全く顧みられていません。です  
から、これから医療の道を目指  
している人に是非読んで欲しい  
本です。私の授業にも取り入れ  
たい内容に、「死の疑似体験」が  
あります。「健康であった高校生  
が突然ガンに冒され亡くなって  
いく、その過程を経験する」と  
いうものです。「形のある大切な  
もの」「大切な活動」「大切な人」  
「形のない大切なもの」を三つ  
ずつ合計十二の大切なものを紙  
に書いて、ガンの進行に伴って、  
その中からあきらめていくもの  
を一つずつ破っていくというも  
のです。さあ、あなたには、最  
後に何が残るでしょうか？

『ちくま文学の森』全16巻

(筑摩書房)

『908/C2/1-1-16』

『はじめての文学』全12巻

(文藝春秋)

『913/H52/1-12』

国語の教員ということもあつ  
て、生徒の皆さんにどんな本を  
読めばいいかと尋ねられること  
があります。

論理的文章を薦めることも多  
いのですが、文学的文章が読み  
たいと言われた場合、一般的に

は川端康成や夏目漱石  
や太宰治を薦めます。

「私は文学系で読書が  
大好き」という人は、

三島由紀夫の『金閣寺』  
と『豊饒の海』とを比

べ読みするのも良いで

しょう。でも、読書は「その時、

その人」、自分が求める作家を見  
つけるために短編集を読んでみ  
てはいかがでしょうか。

読書に少し自信がある人は、  
例えば『ちくま文学の森』図書

館にもありますが、今、文庫版  
が出ているので、手軽に入手で  
きます。毎月刊行予定なので、  
この図書館報が出る頃には第八  
巻まで買えると思います。テー  
マ別になっているので「美しい  
恋の物語」「変身物語」など自分  
の好きなテーマについて各作品  
を比べながら読めます。また、  
小説・劇作・落語、日本の文学  
から海外の文学まで様々な作品  
と出会えます。こういう作品を  
読むにはすこし我慢が必要かも  
しれませんが、二、三冊読めば  
読み慣れます。きっと好きな作  
家が見つかるでしょう。

読書が苦手な人は、『はじめて  
の文学』全十二巻。これも図書  
館にあります。若い人に人気の  
山田詠美・よしもとばななをは  
じめとして、村上春樹・宮部み  
ゆき・浅田次郎など、今活躍し  
ている人気作家の作品が味わえ  
ます。

